

m h R

Parentality / Artistry

「縁あって子どもはいない」とサブタイトルをつけた「子育てと美術 2016」に子どもがいる私が作家として加わるには、複雑な個人史を明かさねばならない。

「私、結婚しない。だから赤ちゃん産まないの〜！ウフフ」5歳の時、親戚の婚礼で「あなたも大人になったらお嫁さんになって子どもを産んで…」とおばさん達に言われてニコニコ即答し、その場を凍りつかせたことは明瞭に覚えている。生来、歳の離れた兄達との間に引かれている線を消す方法を欲していたので、将来課せられる役割を拒絶する「非婚非産」というカウンターを打ち込んでみたらお節介な口を封じられたのだ。ねじれた成功体験となったこの幼少の誓いは生殖機能の先天的かつ後天的な不全性を指摘されるまで揺らぐことなく、長じて様々な言説に触れるにつれ、性別からの解放、自由と自立の選択、悪い遺伝子の消滅などと固められ、「産まない」ことをアイデンティティとして植え付けていった。

二度の卵巣嚢腫除去手術の後、葡萄状に密着した両卵巣の腫瘍は悪性ではなかったが、最初の手術の始末がよくなかったために医師は「産めない」可能性について言及した。涙がはらりと落ち、それから止まらなくなった。周囲は「産めない」ことを悔いていると思ったが、そうではない。退院後も「なぜ泣いた？」と自己分析を繰り返し、説明しがたい感情の言語化を何度も試みた。やがて考えることをやめた数年後、医師は「ありえない」はずの妊娠を告げた。

自分の中にいるのに自分ではなく、出産によって分離される個人。自分の中の他人。共生関係にあった妊娠中から出産後に共同体となっても、ずっとうろたえた。「痛いママ」だった。今も親である私と個人としての私の間で葛藤している。「産めない」から「産めない」そして「産む」を横断して、なおも悩み続ける対象は子どもではなく、自分自身なのである。「私」への執着に他ならない。

子どもがいないカップルが珍しくない美術コミュニティで「子育てと美術」と言葉を差し出した前回(2013年)、「関係ない」と不快感を示した向きは少なくない。性的表現や政治に関わる表現のようにタブー視し嫌忌される現実を見、「子育てと美術 2016」では1年半近く「結婚歴があつて子どもがいない」作家らと子ども・子育てを巡る情報を共有し、時折対面で議論してきた。

「子どもがいない」多種多様な理由を突き詰めていくと、「自分嫌い」と「自己保存」のねじれに突き当たる。生物学的にシンプルに受け入れるのを、「親になる」ことを、個人により強度は違うが並々ならぬ逞しい想像力で拒絶させていく情動。それはやはり「私」への執着から生じているとしか言いようがない。「産まない」は、「産めない」様々な理由を一言にまとめ、批判を寄せ付けぬ言語化、アクションなのだ。5歳の私が成功したように。

美術家は作品を作り、産み続ける。次代に遺ろうと遺るまいと関係なく知識・技術を集約させ、「私」を送り込む。美術家の営みは意識的無意識的に過去、現在と未来が地続きで、「子育て」と相似形に見えてくる。「子育てと美術」互いに活かし合い学び合う。そういう関係もいいだろう。が、「私」への執着を剥き出す美術家の美術家らしさとその所産は個の生の時間を凌駕し、追いつこうにも追いつけないと過度な想像力が私を満たす。そしてまた、美術家に言葉を投げ渡したくなるのだ。

えむ・えいち・あーる

2001年から村田早苗(むらた・さなえ/1965年生まれ)が美術活動の際に用いる符丁。社会学部でジャーナリズム研究、メディア論を学び、アートに接近。斎藤記念川口現代美術館の無期休館後に始めた「川口現代美術館スタジオ・プロジェクト」を皮切りに、気にかかる言葉・現象を美術家に投げかける。既婚。一女あり。